兵庫県立西脇北高等学校平成27年度学校評価

1 教育目標

変化の激しいこれからの社会の中で、自立して豊かな人生を送るために、必要な「確かな学力」「豊かな心」「健やかな身体」を身につけさせる。

2 教育方針

地域ボランティア活動をはじめとした様々な体験活動により生徒に自己有用感（自信と誇り）を持たせるとともに、基礎学力の定着や人間関係スキルの習得、ルールやマナーの遵守、モラルの構築など社会性を身につけることで、適切な勤労観、職業観に基づく進路実現など一人ひとりの自己実現に結びつける。

4 学校評価の実施方法についての学校関係者評価

丁寧で妥当な評価が行われている。可能であれば生徒代表の座談会を行うなどして、直接生徒の声を聞き分析できれば更に充実できる。年間数回の評価委員会での評価は難しい。教育現場を知らない者としてどう評価すれば良いのか悩むが、学校全体で大変努力されていることはよくわかる。緻密な評価・分析がなされている。様々な学校行事や授業見学などに参加することで学校評価がより適切に行えるようになった。評価表も随分記入しやすくなった。委員会で今後の具体的な指針を出していけるようにしたい。

5 総合的な学校関係者評価

学校の特色をいかした取り組みを実施している点で高く評価できる。生徒の社会的自己実現にどう結びつけるかが今後の課題である。A評価が多いが妥当な評価である。校内、地域、他校との交流活動と生徒のために様々な実践体験活動を続けられていることは評価できる。体験活動を通して学校への誇りや社会とのつながりの大切さ、学校教育への思いなどが向上し、イキイキとした生徒が多く育ってきている。西脇北高校の地元での評価は毎年良くなってきたと聞く。先生方の粘り強い努力を評価する。西脇北高は過去の生徒指導の経緯から他校に比べて危機感がある。進学、就職ともに力を入れていただきたい。ボランティア活動だけでなく様々な面で高く評価できる学校に育ちつつある。これらの取り組みが継続・進化することを期待する。定時制（多部制）高校としてのモデルケースともなる西脇北高方式として定着するとよい。今年は評価委員として西脇北高校の全体的に取り組みの詳細を知ることができよかった。より多くの保護者の方に学校の取り組みを知っていただきたい。願わくば退学者の数を減少させてほしい。

3 学校自己評価結果

分野	評価項目・取組内容	4段階評価	学校の取組状況・改善の方策	6 評価項目ごとの学校関係者評価 学校自己評価の結果及び改善方策についての評価
(1)教育活動全般に関する取組	①HPや北高だより、メールを利用した広報活動を推進する。特にメール配信は登録数を150以上にする。 ②育友会総会、文化祭、体育祭、公開授業週間、3者面談、クリーンキャンペーン等、諸行事を10回以上実施し、のべ保護者来校数を400とする。 ③地域の方々と行うボランティア活動や教職員と保護者との合同補導を実施する。 ④行事の引き継ぎ、議事等を電子化・共有化し、グループウェアを活用することで校務の効率化を図る。 ⑤学校の懸案事項を検討する学校課題検討委員会を設置する。 ⑥教員自らの取り組みや課題を明確にした学校評価を実施する。 ⑦生徒の多様なニーズに対応できるよう、教務規定を見直す。 ⑧勤務時間の異なる1・2部と3部職員の情報交換会を行い公務の円滑化を図る。	A	①各事業担当者を掲載者とし、更新可能者を増したHPや年10回の北高だよりの発行による広報活動を行った。一方で、メール配信の登録数は97名と目標は未達成となった。来年度は、「入学のしおり」の生徒個人票の裏に、メール配信の受信登録の欄を設け、入学当初から登録してもらうことで、毎年登録数を増やす。 ②入学式、育友会総会、文化祭、体育祭、オープン・ハイスクール5回、オープンスクール2回、クリーンキャンペーン、後期入学式以外にも、体験発表会、ビブリオバトル発表会、心のサポートシステム研究報告会などを実施した。入学式20名、育友会総会49名、文化祭157名、体験発表会54名、体育大会82名、オープン・ハイスクールのべ77名、ビブリオバトル発表会13名、心のサポートシステム研究発表会15名、合計467名の参加があり、当初目標を達成した。今後はHP等を通じて広報することで更なる参加を促す。 ③5月に、地域の森林ボランティアに1年次生全員が参加した。また地域の行事に、教職員と保護者がともに参加した。夏休みに加えて11月にも育友会と学校が、合同補導を実施した。当初目標は達成できたので、今後は補導回数を増し、生徒がたむろしがちな所を巡回場所とする。 ④行事ごとに工程、個々の職員配置が分かる要項を作成した。事業計画と反省を共有ファイルサーバに保存することで、来年度への引継ぎも円滑になった。校務運営委員会や職員会議の議題・資料について電子媒体で保存することで、2次利用を容易にした。今後は刊行物作成等のタイムテーブルを作り、発刊機能が上手く働くシステムを作っていく。 ⑤学校課題検討委員会は設置したが2回しか開催できなかったので、次年度には計画的に5回の開催をする。 ⑥自己評価調査で自らの教育活動をチェックすることで各教員の課題を明確にして学校評価を実施している。今後は情報機器を利用することで自己評価の機会を増やし、日常的に振り返れるようにする。 ⑦教務規定検討委員会を14回開催し、検討した。その検討内容を職員会議で報告した。改正された教務規定は来年度から実施する。 ⑧職員全体での情報交換会は持つことは出来なかったが、総務部や生徒指導部等の専門部ごとでは1・2部の職員と3部職員の意見を交換することができた。今後はグループウェアや共有ファイルサーバーを活用することで会議内容の周知を図る。	評価は妥当で良好である。公開諸行事を10回以上実施し、保護者来校数が目標の400を越えたのは良かった。1・2部、3部教員が全体で情報交換を持つことは重要だが困難なことであるので専門部ごとでも場を持てたことは評価ができる。今後は時間的な問題もあり難しいと思うが、教職員全体（1・2部、3部）の意見交換会を年に2回ほど開催してほしい。学校からの情報発信も大切なことだが、地域の方々に来校いただくことの方が効果が大きい。その点では諸行事への地域参加は大きな効果があったと言える。地域や保護者との結びつきを重視する姿勢は高く評価できる。ただし、保護者の関心度は余り高いとは言えないので、今後はどのような働きかけが可能なのかを考えてほしい。中学校でのメール配信率は高いので、高校でも入学時に対応することで実績が上がる。学校と地域と保護者との連携をより一層期待する。
(2)本校の特色ある取組	①学校設定教科「学び」で身に付けたコーピング手法を実生活で活用できる生徒を70%以上にする。 ②「西脇北高検定」の5級以上の合格者数をのべ80人以上にする。 ③ 公開授業エントリーシートや授業見学シートを活用して、年間2回のオープンスクールを実施するとともに各教科で設定したテーマをもとにした研究授業とそれに係る授業研究会を実施し、各教科における研究・成果を全教員で共有して授業力の向上を図る。 ④検定試験結果の集計と分析を全職員で共有し生徒を指導することで、生徒の検定試験合格に向けての意欲をさらに喚起し、組織的な取組をさらに進める。また、1級合格者が受験する検定問題の開発を行う。 ⑤兵庫教育大学大学院との共同研究により「ボランティア活動は、自己有用感と学校適応力を高めるための有用な活動である」との仮説を数値的に検証する。 ⑥地域ボランティア活動、東日本大震災現地ボランティア活動、また兵庫県北部地域の防災ジュニアリーダー合宿を主管し、体験活動をさせることで地域社会の一員である自覚を高める。地域ボランティア活動は90回、のべ1000人の参加を目標とする。 ⑦学校図書館活用推進モデル校としてブックトークやレファレンス大会を行い、「西脇北高100選」を選定し、図書貸し出し数を180にする。	B	①アンケート調査によると、約80%の生徒が「授業内容を理解できるか」の問いに対して、「とてもそう思う」または「そう思う」と答えており、学習内容が浸透していると言える。また、学んだ事柄を生活場面で使用したとき有効であったかどうかを問うた結果では、約60%の生徒が、「とても役に立った」または「役に立った」と答えており、実生活で概ね役立つことを証明している。一方で、「授業内容が理解できない」「実生活に有効ではない」と答える生徒が少なからず存在する。これらの生徒に関して、コーピングの手法以外の人間関係構築スキルの修得方法を考えていく。 ②本年度は、英語の合格者が同時期の比較で約2倍になっており、週末課題等の指導が反映された結果と言える。しかし、本年度第4回までの結果では、国語、英語、数学の3教科における5級以上ののべ合格者数は42人に留まった。来年度以降は、週末課題を増やすことで家庭学習等による学習の習慣づけが必要である。 ③オープンスクールを5月と11月の2回行った。5月は育友会総会日と重なっていたこともあり、外来者の数は50人を超えた。オープンスクールの授業力向上の効果についての職員アンケートでは指導力の向上を答えた者は約90%あり、概ね授業力向上についての効果を実感しているといえる。教員自らが公開する授業をエントリーするためのエントリーシートの活用や授業見学者が記入する授業見学シートの活用についても約80%が活用できるという意見であるが、学習指導案作成については、活用に賛成であるとする意見が30%であるため、より作成が容易な学習指導案の様式に変更する。また、図書館活用を導入した授業や実験、実習を有効に活用する授業研究会を行った。 ④年間5回行う校内検定（北高検定）の結果は、教務部で発行する通信「学び」を全教員と全生徒に配付して、情報を共有した。また、各級の合格者推移に関する特徴的なデータを教科担当者間で議論し、合格者増加のための方策を検討した。本年度は特に、問題の改訂や生徒への自主学習指導の成果により英語の合格者が増加したので、来年度以降、他教科の指導に生かす。また、数学以外の教科では1級合格者が出ており、より上級の問題開発も進んだ。 ⑤5月と11月に花いっぱい運動を実施し、活動の前後にアンケートを行い、分析をすることで、ボランティア活動は自己有用感を高めるための有用な活動であることが検証できた。1月のアンケートでは自己有用感を示す数値が若干低下しており、自己有用感は定着していないとの分析ができる。しかし11月調査より1月調査の方が自己有用感が下がっているので、生徒に自己有用感を持続させるために継続的なボランティア活動を実施していく。またボランティア活動質問紙の書式を途中で変更したため、学校適応力の比較検証はできなかった。次回からは確固とした質問紙を準備し時系列での変化を検証する。 ⑥イベントスタッフや1年次生徒全員による花いっぱい運動など、多くの地域ボランティア活動を実施することができた。また、兵庫教育大学との共同研究で、地域における自己有用感は有意な結果が出た。地域ボランティアでは82回、のべ1000人以上の目標を達成することができた。今後は活動件数も大切だが参加生徒の自己有用感が高まるようボランティア活動を実施していく。 ⑦学校図書館活用推進モデル校としてブックトークやレファレンス大会だけでなく、ビブリオバトル、ブックカフェなどの新しい取り組みも行った。また図書館を使った研究授業を行い、図書館の活用は大きく伸びた。貸出数は昨年度146冊であったが今年は3倍以上の453冊（2月12日現在）の貸出数となった。本年度の伸びは図書館アドバイザーの配置があったことが大きい。そこで来年度は図書館アドバイザーの配置が無くなることを考え、図書館が常に開館できるように職員の配置を工夫し、司書教諭を核とする体制作りをする。	ボランティア活動からボランティア学習へと拡大深化させ、ボランティアを通じて得られた自己有用感を日常生活への意欲につなげることが課題と思われる。生徒を主においての積極的取り組みはすばらしい。約80%の生徒が授業内容を理解できると答えていることは評価できる。ただ理解できていない少数生徒をすくい上げることも重要である。オープンスクールが教員の指導力を向上させたことも良かった。学校図書館利活用促進モデル校となり、図書館活用が大きく伸びたことも大変評価できる。ボランティア活動を通して自己有用感を数値化して判定する試みは興味深い、継続することでより数値が正確になる。ボランティア（防災）の西脇北にはじまり、今では北高検定、また、コーピング手法の定着を図るなど、他校にはない取り組みが達成できている。わかりやすい授業、北高検定、コーピング、ボランティア活動、生活体験発表大会、部活動、学校図書館活用等々、特色ある取り組みを積極的に実施していることに敬意を表する。

分野	評価項目・取組内容	4段階評価	学校の取組状況・改善の方策	学校自己評価の結果及び改善方策についての評価
(3)生徒の学力を伸ばす取組	①心のサポートやコーピング及び公開授業での生徒観察などの取り組みを有効に活用して、生徒に安心して落ち着いた学習環境が確保し、アンケートにより状況を確認する。 ②授業のない時間を有効活用するため、自主学習室を設置する。 ③生徒の学習満足度を75%にする。 ④国語と英語で習熟度授業を実施する。	A	①高校生心のサポート事業での取り組みによる、教員から生徒への声かけやコーピングの導入に併せて、授業中の携帯電話使用の指導が進み、生徒の授業への取り組み状況は昨年度に比べて非常によくなった。教員アンケートによると「落ち着いた雰囲気の中で授業ができている」の問いに肯定的に答える教員が95%あり、概ね落ち着いた状況で授業展開ができていると言える。今後は授業中の私語をなくす取り組みを行う。 ②職員室前の質問スペースをはじめとして、「図書館」「進路指導室」等を自主学習室として設置した。図書室は理科や数学の希望者補習にも活用したが、来年度以降は通常授業に空白ができた生徒への対応を含めた学習室を設置する。 ③「授業はわかりやすい」の問いに対する肯定的な解答は71%、同様に「授業内容が自分にあっている」では73%であった。今後、さらに教員同士の授業見学や授業のユニバーサルデザイン化を行う。また、「授業で自分の実力がついた」との問いに対する肯定的な意見は64%であり、個人の学力差の大きい本校にあって、「授業内容が難し過ぎる」または「簡単すぎる」と感じる生徒が少なからずある。このことから、本年度から実施している習熟度別授業展開については、個のニーズに対応可能な本校に適した習熟度別クラス編成による授業展開を行う。 ④英語では「英語探究」、「ベーシックイングリッシュ」、国語では「国語総合（2年次）」「現代文A」「小論文講座」で習熟度別授業を展開し、生徒の到達度と進路希望に応じて授業クラスを編成した。来年度も同講座で習熟度別授業を展開し、その効果を数値評価する。また、数学と理科の自由選択授業で開講する「数学探究」と「理科探究」についても、習熟度別授業を行う。	生徒の満足度75%を更に伸ばしてほしい。授業に空白ができた生徒への対応を含めた学習室を設置することは有効である。習熟度別クラス編成による授業も効果があるようだ。中学校の復習が最も効果的である。清掃指導は全ての指導の中でも原点と言えるので、引き続き先生方のお力添えをお願いする。廊下自習机を活用した自主学習も定着しつつあるのではないか。自ら学ぶ意欲の少ない生徒が多いようなので、それでも一層の尽力を願う。携帯電話の授業中の指導、図書室の活用、習熟度別授業、心のサポートシステムなど、いろいろな取り組みの成果出ていて今後に更に期待が持てる。
(4)生徒指導	①問題行動件数、退学者数を1割削減する。 ②3部にもSHR、清掃時間を導入し、定着させる。 ③大学との共同研究により生徒の自己有用感の向上を検証する。 ④授業態度やマナーを改善させるルール作りと指導を徹底する。 ⑤学校行事の役割の中に生徒を配置し、生徒が活動する領域を広げ、学校行事の充実を図る。	A	①一部生徒が複数名で再犯する事案が重なったことから昨年度に比べて問題行動件数は増加した。今後はユニバーサル化した特別指導を行うことで再犯を防ぐ。 ②4月より各クラスでHR教室の掃除を始めた。毎日13限終了後に5分間の掃除の時間を取り、その後SHRを実施している。掃除の方法がわからない生徒もいたが、担任の指導できちんと取り組めるようになった。日々の清掃活動ができるようになったため行事の際の大掃除もできるようになり成長がみられた。 ③1年次生全員が参加するボランティア活動「花いっぱい運動」を2回（5月、11月）実施し、その結果から、地域における自己有用感、クラスにおける自己有用感に有意な変化が見られたことが明らかになった。しかし、自己有用感が持続していないことが、1月の生徒アンケートで明らかになったので、継続的なボランティア活動を行う。 ④4月から、授業中の携帯電話の取り扱いについて、生徒、保護者に文書、集会等で徹底することで、安心して学べる環境づくりができた。ただ一部の生徒が授業中に指導に従わず、私語をしたり携帯電話を触ったりするので、そのような生徒に特別指導を行うことで授業規律を確立する。 ⑤心のサポートシステム研究事業としてボランテイア活動に1年次全生徒を取り組ませ、活動の領域を広げることができた。事前指導を行うことで生活体験発表会等学校行事の深化充実が図れた。今後は事前、事後の指導を徹底することで主体的に事業を進めることができる生徒を育成していく。	ボランティア活動、居場所作りを核にした開発的生徒指導の一層の充実を期待したい。問題行動減少への心のサポートの取り組みはすばらしい。様々なボランティア活動で自己有用感を持ち、またボランティアを通じて地域や他学校と交流できたことは大変有意義で良かった。整然と進められた卒業式に近年の西脇北高の取り組みの成果が現れていると感じた、本当に落ち着いた卒業式であった。部活動やボランティア活動などで、生徒の自己有用感・達成感などを実感させていることが、生徒指導面での良い結果につながっている。問題行動件数の多少の増減は余り気にすることなく、自己有用感・達成感を得させる方向で進んでほしい。生徒個々への対応は評価できる。
(5)進路指導	①西脇北高校インスパイア・ハイスクール事業を活用し、キャリア教育としてのインターンシップの達成率100%を目指す。 ②進路ガイダンスや企業見学会等の進路行事や進路ホームルームを充実させ、望ましい勤労観と職業観を養成する。 ③ハローワークや地域商工会との連携を密にして、組織的な進路指導を図る。 ④夏季休業中や「総合的な学習の時間」、「キャリア学習ウィーク」を活用し、進学・就職に分けて、計画的継続的な補習を実施する。	A	①年度当初の就職希望者32名に案内し、全員がインターンシップに参加し、目標が達成できた。今後も就職希望者全員をインターシップに参加させる。 ②進路ガイダンスや企業見学会等の行事を計画通りに実施し、生徒のキャリア教育に役立った。進路HR計画にもとづきHR活動を充実する。進路ホームルームについては、各行事の事前指導と事後指導を行ったことで、より行事への取り組む姿勢が向上した。今後も事前事後の指導を継続する。 ③キャリア学習講演会にハローワーク職員を招くなど例年以上に連携を密にできた。また、商工会主催の連絡会議にも積極的に参加した。今後も日常的に交流を持つことで、より親密な関係を築いていく。 ④夏季補習や「総合的な学習の時間」を活用した就職進学講座、キャリア学習講座を計画通りに実施した。さらに生徒の進路志望に応じた進学補習を放課後に実施した。今後は年間を通じて継続的補習を実施をしていく。	学校で育てた力を実社会での自己実現につなげることが課題である。他の活動とのつながりをどのように具体化するかを検討すべきである。補習は継続するべきだ。就職希望者全員がインターンシップに参加できたことはとても良かった。ハローワークや地域商工会との連携を密にすることは重要で、就職率アップにつながる。生徒一人一人は、すばらしい力と持っているので、我々地域が就職情報を提供することが大切である。現在の困難な社会情勢の中で、良い成果を得たことを評価する。生徒自身の積極的な取り組みが確実な結果につながっている。進学希望の生徒が増え、情報収集や進学対策を積極的に取り入れているので、今後に期待できる。
(6)保健	①検診便りを発行し、検診の大切さを理解させ、諸検査の受診率を100%に近づける。 ②時宜に応じた保健便りを発行し、自己の体調管理ができるよう、保健指導をする。 ③年間32回のカウンセリングデーを活用し、生徒の精神面での支援を充実する。	A	①健康に対する意識付けと、検診日の通知を徹底することで、前年度より少しだけ受診率が向上した。今後は年2回の健康相談を実施することで、自己管理能力をさらに身につけさせる。 ②図解を用いた分かりやすく読みやすい保健だよりを発行することができた。 ③継続的にカウンセリングが実施でき、生徒の支援に繋がった。しかし、カウンセリングが必要だと感じる生徒をカウンセラーに繋ぐことができなかったケースもあったので、保護者を通じて協力を得るなどの取り組みを行う。	生命・健康が特に大切なポイントなので、更に保護者と学校とが一体となった保健指導を進めてほしい。規則正しい生活指導が基本である。保健室が生徒の「癒やしの場」としての機能を果たすことが最重要である。学校保健委員会で統計などを基にした具体的な取り組みを知り、今後も数値で表される取り組みを実施してほしい。
(7)人権教育・特別支援教育の推進	①文科省の人権教育指定校として「人の命を大切にする」気持ちを向上させた生徒を70%以上にする。職員研修会は3回以上実施する。 ②生徒の実態調査を行い、障害の度合い、発達程度・特性・周囲との人間関係などを的確に把握し、必要に応じて個別の指導計画を立てる。 ③社会的なニーズ、保護者からの要望に対し、本校で取り組む支援についての基準を明確にする。	A	①職員研修は、年3回を実施できた。そのことにより、人権に対する教職員の理解は深まった。一方、研究指定の目標として掲げた〈「人の命を大切にする」気持ちを向上させる〉、という目標は、第1回と第2回のアンケート調査結果が、27%から47%と、20ポイント上昇はしたが、目標の70%は越えられなかった。要因としては、第1回人権HRの講師の話が「家族を大切にする」というテーマだったために、「命の大切さ」にポイントを集中させることが出来なかったと考える。今後は、より目標に沿った講師の招聘や講演会の事前事後の指導で目標を生徒に意識させた取り組みをしていく。 ②気になる生徒の実態調査を行い、その後の支援に繋いでいった。今年度は特に、特別に支援の要る生徒の進路の実現に向けたケース会議や就労への移行支援計画書の作成などによって円滑な進路支援ができた。発達障がいは見極めが難しく専門的な知識を高めていく必要があるため、今後は特別支援コーディネーターを招聘しての職員研修などを実施していく。 ③改正障害者基本法の実施を来年度に控えた特別支援教育を推進するため福祉講演会を実施した。今後は授業のユニバーサルデザイン化をすすめる。	特別支援の視点を生徒指導にどう組み込むかがこれからの大きな課題である。今後は職員研修の回数と中身の充実を図ってほしい。エレベーターは設置されたが、体育館2階への車椅子の簡易昇降機が幅広い教育活動を展開させる。多様な生徒が通える高校として、受容範囲が広い学校である。
(8)情報教育の推進	①普通教室や特別教室でコンピュータがいつでも利用できる大型モニター・PCセットを整備し、情報機器を利用した授業づくりを推進する。 ②情報処理室で全教科が授業が展開できるようにシステム設定やソフトウェアの導入を行う。	A	①大型モニターの準備はできたが、設置できていない。各普通教室のインターネット回線の整備はできているため平成28年度当初には普通教室へ設置できるようする。 ②在校生全員と全職員のIDとパスワードを設定しており全教科で授業ができるように整備済みである。ただし、情報授業の関係で情報処理室が空いている時間が少なく、実際に授業で活用するに至っていない。各教室から近く、すでに情報機器が準備できている図書室で展開することが多い。今後は時間割の編成の工夫で情報教室利用し、普通教室での情報機器を用いた授業を実施する。	図書教育の充実、前進、活用を更に伸ばしほしい。設備を充実させることは良いことだ。PC等情報教育設備の活用を図り、教育効果を高めてほしい。今後の活用状況を見たい。
(9)教職員の資質向上	①今日的な課題に対応するための校内研修を10回以上実施し、外部研修会にのべ15名以上参加させる。校内研修会の内、生徒の内面理解や事例研究に関わる研修を2回実施する。 ②若手教員を校務運営委員に登用することで責任有る役割を果たさせる。また若手教員に順次、オブザーバーとして校務運営委員会を観察させる。 ③年3回の各教科で設定したテーマをもとにした校内授業研究会を実施する。	B	①校内研修では、救急法や学力向上に関する研修、また特別支援教育や学習の評価に関する研修、いじめ問題や複数回にわたるカウンセリングマインドに係る研修をのべ10回以上行った。また、有志による授業のユニバーサルデザイン（UD）化に係る研究会も発足し、多くの職員が参加してUD化に関する見識を深めた。県立教育研修所をはじめとして校外で実施される研修にのべ15名を超える職員が参加した。来年度も教員資質に資する多様な研修を計画的に実施する。 ②若手教員4名を校務運営委員に登用し、さらに若手教員をオブザーバーとして参加させた。今後は個々の若手教員に事業実践を委ねることで、より教員資質・能力の向上を図る。 ③公民科で図書館を活用した研究授業を行い、ブレインストーミングによるワークショップ型授業研究会を実施した。また、実験とポスター発表をテーマにした理科の研究授業、大学教授を招いた理数系分野に係る課題研究指導及びアクティブラーニングや反転授業、アカディミックライティング等の先進的な授業展開の授業方法の研究を行った。来年度は、さらに研究授業の実施教科を拡大して行い、理数系分野の新しい授業展開についても研究を進める。	事例検討を中心とした研修の一層の充実を望む。様々な校内研修を10回以上実施したことを高く評価する。これからは、若手教員の指導に力を入れ、教育研修所等での研修には引き続き参加していただきたい。校務運営委員会への若手教員の参加は、若手に学校全体を理解させる上で有意義である。より教員のチームワークが強固になる。全教職員が生徒に寄り添える指導ができるよう研修体制の充実を願う。また多様な生徒に対応する教員へのストレス対応、心のケアやサポートの充実をよりはかってほしい。